

移動する生徒の海外協働学習
COLP : Cooperative Online Learning Program
for International Mobile Students
Between Sponsoring and Affiliate Educational Institution

浜松学院大学 津村 公博
常葉大学 白鳥 絢也
常葉大学 田島 喜代美

1.はじめに

1990年の入管難民法改正により、日系人を対象とした「定住者」の在留資格が創設された。これにより、輸送機器産業が集積する静岡県西部に、多くの日系デカセギ労働者が流入し、その保護者とともに日系人の子どもたちが静岡県西部地域の公立小学校に在籍するようになった。日本の公立小学校で教育を受ける子どもたちは、教室言語が日本語であり、日本の学習指導要領に定められた教科をすべて履修することになる。そのため、日系人の子どもたちは、公立学校での在籍年数が長くなるにつれて、彼らの母語喪失の傾向が高まる。静岡県西部地域では、ブラジル連邦共和国の日系人に次いで、フィリピン共和国の日系人が近年増えているが、日系フィリピンの子どもの母語を失いそれに伴う学力不振の問題が顕在化されている。日本の公立学校に在籍する日系人の子どもたちは、日常生活に必要な基本的な日本語を習得できるが、学習に必要な日本語（学習思考言語）が育たないのである。母語を学ぶことで認知能力を身に着け、日本語で学習思考言語促進させることは、多くの研究が示している。母語・母文化の継承が不十分であると、文化的アイデンティティの確立が妨げられ、自意識や自尊心の低下につながる。さらに、文化の意義や重要性に対する認識の欠如は、日本文化への理解の低下につながる可能性もある。さらにキャリアを選択する際に不利になるリスクが想定される。

本研究は、「受け入れ地域」である浜松市の高校と「送り出し地域」フィリピン共和国ダバオ市の高校がオンライン海外協働学習「COLP : Cooperative Online Learning Program（以下「COLP」という。）」を活用し、デジタルエスノグラフィデータを収集し、ICT（デジタル技術）を活用した海外協働学習の効果を検証する。

2.研究の背景

2-1 浜松市における日系人の子どもたち

1990年の改正出入国管理及び難民法により、多くが日系人である相当数のデカセギ労働者の日本への流入が促進された。2008年の金融危機後により多くのデカセギ労働者が減少した。

下記の図は、浜松市内の公立小中学校の外国人児童生徒の在籍者数の推移である。

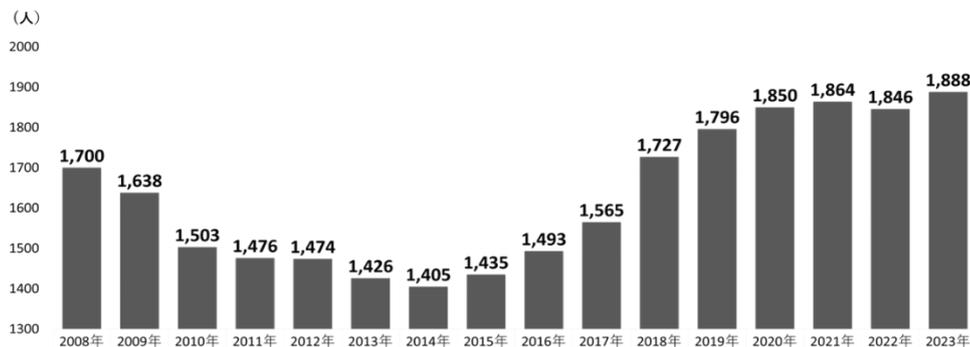


図1 外国人児童生徒の公立小中学校の在籍者数

出典) 浜松市教育委員会『「外国人子供教育支援推進事業」説明資料』2023年5月を元に筆者作成

2009年以降は、デカセギ労働者の保護者の帰国により、外国人児童生徒数が減少したものの、2015年以降は増加に転じている。2018年以降、その数は着実に増加し、金融危機以前の水準である1,700人を超え、2023年には1,888人に達している。

次に国籍別の在籍者数を見ると、浜松市内に在籍する外国人児童生徒の国籍別の在籍数の割合はブラジル連邦共和国が45%であり、フィリピン共和国が17%、ペルーは10%であり、全体の72%を占めている。これらの国籍の児童生徒が大きな割合を占める理由は、彼らの在留資格にある。日本における在留資格の種類は29種類あるが、前述したように、日本政府は、1990年の出入国管理及び難民認定法（入管法）を改正し、「身分又は地位に基づく在留資格（居住資格）」として、定住者の資格を新設した。これは、主に南米日系人労働者を呼び寄せるために設けられた措置であり、かつてブラジル連邦共和国、ペルーに移住した日本人の子孫が定住者の資格で来日することを可能にした。近年では、フィリピン共和国からも特定技能、技能実習、興行等従来の在留資格とは異なる定住者の資格で日系人労働者が増加しており、令和5年度現在、浜松市内の公立学校の在籍者数は、ブラジル連邦共和国に次いで2番目に多い状況になっている（図2）。

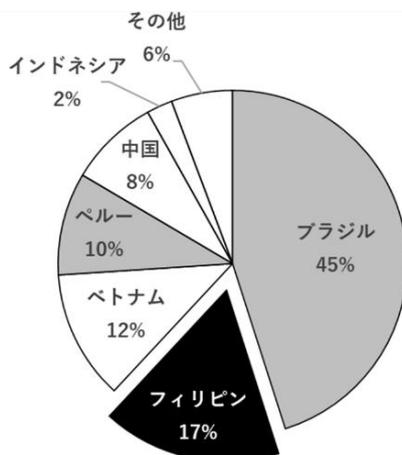


図2 浜松市における外国人の子どもたちの「送り出し国」

出典) 浜松市教育委員会『「外国人子供教育支援推進事業」説明資料』2023年5月を元に筆者作成

2-2 中学校の在籍者数を分母とした高校進学率

浜松市における4年から2023年の10年間の小中学校に在籍者の総数は以下の通りである。2014年から2023年までの各年度の在籍者数を図に表した（図3）。

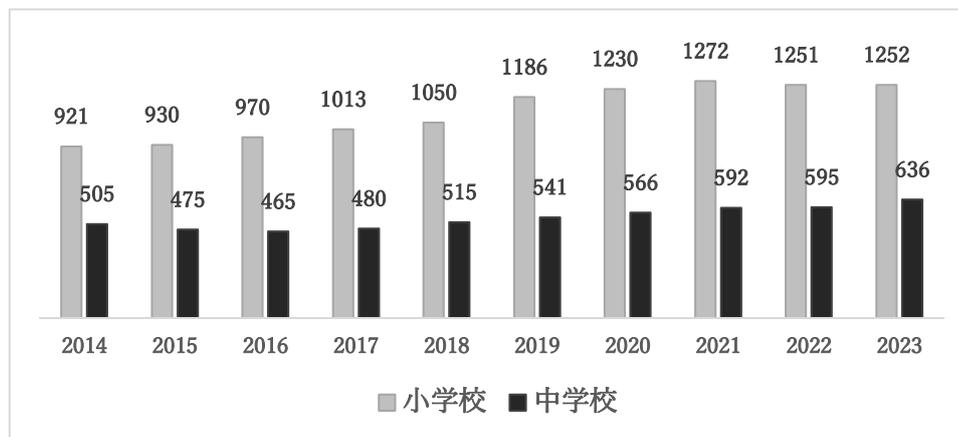


図3 義務教育年齢期の在籍者数

出典) 浜松市教育委員会『「外国人子供教育支援推進事業」説明資料』2023年5月を元に筆者作成

日本国籍を有しない外国人の児童生徒には義務教育が適用されていないため、在籍者数は、小学校から中学校を通じて、学年が上がるごとに減少する可能性がある。海外につながる生徒の高校への進学率は、中学校の最高学年で3年次の在籍者数が分母となっていることが、高校への進学率が高い理由の一つである。

全国的な調査としては、令和2年の日本学術会議の「地域研究委員会 多文化共生分科会」による調査はある。文科省の「学校基本調査」の中学校、高校の外国人在籍者数にもとづいて、海外につながる生徒の高校進学率を推定している。2015年以降の高校進学率は、50%台から60%台へと上昇しているが、この高校進学も、浜松市同様に中学3年次における在籍者が分母となっている。

3.研究の目的

本研究の目的は、日本とフィリピンの国境を越えた学習者におけるCOLPの構築とその有効性を示すことである。COLPを通じて、日系フィリピン人の送出し地域であるフィリピン共和国の教育機関と連携し、日本語と母語及び母文化と日本文化を強化することにより、送り出し地域と受け入れ地域のグローバルリーダーとして活躍できる人材の育成を目指している。

4.成果

4.1.フィリピン共和国のダバオ市 Region XIとの教育連携事業の実現

Davao City Special National High School（以下「DCSNHS」という。）をパートナーズスクールとして、静岡県内の高校を対象として実施した。

4.1.1 静岡県立浜松北高等学校定時制「総合的な探究の時間の授業」

開始日	授業	オンライン海外協働授業	COLP導入
5月～8月2023年	4回	2回	なし

回数	年	月	日	曜日	実施校	学年	国籍	人数	
1	2022	5月	13日	金	19:30-21:00	静岡県立浜松北高等学校 定時制	1-2	フィリピン、ブラジル、日本	27
2	2022	5月	27日	金	19:30-21:00	静岡県立浜松北高等学校 定時制	1-2	フィリピン、ブラジル、日本	27
3	2022	6月	17日	金	19:30-21:00	静岡県立浜松北高等学校 定時制	1-2	フィリピン、ブラジル、日本	27
4	2022	8月	31日	金	19:30-21:00	静岡県立浜松北高等学校 定時制	1-2	フィリピン、ブラジル、日本	27

授業

静岡県立浜松北高等学校定時制の生徒が、日本の高校生の学校生活について紹介する英語によるプレゼンテーションを実施する。

ICT 技術の活用

オンラインミーティングツールの通常の機能に加えて、ブレイクアウトルーム、ホワイトボード、クイズと投票、トランスクリプト生成等、オンラインミーティングツールの機能の課題を研究し、これらを COLP に実装する可能性を検証した。



4.1.2 静岡県立湖南高等学校 全日制英語科「総合的な探究の時間の授業」

開始日	準備授業	オンライン海外協働授業	COLP導入
9月～1月2023年	4回	2回	なし

回数	年	月	日	曜日	実施校	学年	国籍	人数
1	2022	9月	9日	金	静岡県立湖南高等学校 英語科	1	日本、ブラジル	27
2	2022	2月	17日	金	静岡県立湖南高等学校 国際交流委員会①	1-2	日本	16

授業

DCSHS と学校生活や将来について英語によるフリーディスカッションを実施した。

ICT 技術の活用

既存のオンラインミーティングのプラットフォームソフトの機能に加えて、浜松学院大学のメディア・スタジオを中心とした静岡県立湖南高校およびDCSHS を結ぶ、オンライン三元中継授業を実施した。



4.1.3 海外協働学習オンラインプラットフォーム予備調査からの課題

以上、令和4年度は浜松市内の県立高校2校での予備調査から、既存のオンラインミーティングツールを活用した海外協働学習について、以下の課題を特定することができた。

1. 海外オンライン協働授業が断続的であり、前後の「準備期間」と「ふりかえり期間」において、学習の継続や発展に支障が生じる
2. 協働学習が受動的となり、アウトプットが少ない。
3. 海外協働学習に参加した生徒を評価する指標が不十分である。
4. 年間を通した授業への組み入れがスムーズに進行できない。

4.2 海外協働学習オンラインプラットフォーム「COLP」の実装

令和4年度の予備調査を踏まえ、令和5年度は本調査として「海外協働学習オンラインプラットフォーム（COLP）」の実装を行った。特定された課題の解決策として、オンプレミス型（on-premises）の学習管理システム「Learning Management System（以下「LMS」という。）を導入した。

既存のクラウド型のLMSは、学習が制限され、双方向性や発展性が見込めない。対照的に、オンプレミス型のLMSはサーバーを所有またはレンタルし、その柔軟性から双方向性や発展性を高め、独自のLMSを開発することが可能である。

ダバオ市教育省との教育連携による学習管理システムは、開発には試行錯誤が予測されるため、オンプレミス型の学習管理システム（LMS）の導入を試行しCOLPの開発を目指した。以下に、研究の成果を示す。

4.2.1 COLP の特徴

COLP は海外オンライン協働学習プログラムとして、LMS と Learning Community System (以下「LCS」という。) の2つのシステムで構成されている。(表1) LMS の機能である、学習管理システムに加え、学習者同士が交流することができる、コミュニケーションツールとして LCS の機能を併せ持つことが特徴である。これにより参加者はオンライン上でコミュニケーションをとることができ、その発言について抽出することができる。

表1 COLP の機能と特徴

システム	特徴
COLP (LMS)	コース、レッスン、トピックに構成され、課題の付与、学習評価のクイズやテストの提供も行い、講師役の大学生コーディネーターとは双方向の関係にある。学習は、動画、画像、音声などの多様な学習資源を提供できる。これにより、学習者は自分のペースでコースを進めることができる。
COLP (LCS)	生徒間での多様な学習活動の参加を可能にするコミュニケーションのプラットフォームとして機能する。COLP (LCS) を活用した多様な文化的背景を持つ高校生の学習記録や学習者間の発言を抽出することが可能である。

4.2.2 静岡県立浜名高等学校定時制生「総合的な探究の時間の授業」COLP の実施

静岡県立浜名高等学校定時制4年生「総合的な探究の時間の授業」を対象に、COLP を活用した海外協働学習を実施した。

開始日		準備授業	オンライン海外協働授業	COLP導入
9月～11月2023年		6回	2回	あり

回数	年	月日	曜日	実施校	学年	国籍	人数	フィリピン	
1	2023	9月15日	金	19:30～21:00	静岡県立浜名高等学校 定時制	4	フィリピン、ブラジル、インドネシア、日本	22	15
2	2023	9月22日	金	19:30～21:00	静岡県立浜名高等学校 定時制	4	フィリピン、ブラジル、インドネシア、日本	22	15
3	2023	10月6日	金	19:30～21:00	静岡県立浜名高等学校 定時制	4	フィリピン、ブラジル、インドネシア、日本	22	15
4	2023	10月13日	金	19:25～20:25*	静岡県立浜名高等学校 定時制	4	フィリピン、ブラジル、インドネシア、日本	22	15
5	2023	10月27日	金	19:30～21:00	静岡県立浜名高等学校 定時制	4	フィリピン、ブラジル、インドネシア、日本	22	15
6	2023	11月17日	金	19:30～21:00	静岡県立浜名高等学校 定時制	4	フィリピン、ブラジル、インドネシア、日本	22	15

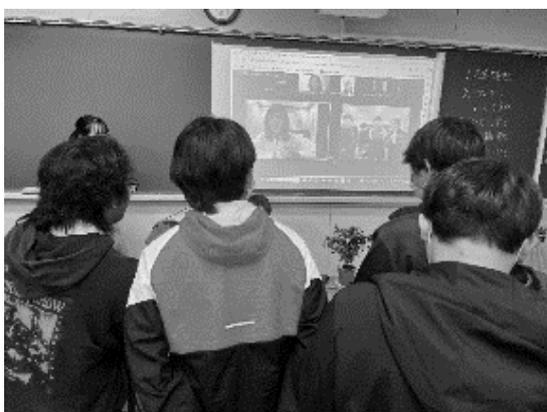
授業

静岡県立浜名高等学校定時制の生徒が各テーマのグループに分かれて、プレゼンテーションをまとめ、オンラインミーティングと COLP を活用して、DCSNHS の生徒にプレゼンテ

ーションを実施した（表2）。

表2 海外協働学習実施内容

回	月日	曜日	時間	浜松	ダバオ	COLP	内容、備考
第1回	9月15日	金	19:30~21:00	準備①		Course Lesson 1	ログイン、COLPオリエンテーション、(宿題)Profileづくり
第2回	9月22日	金	19:30~21:00	準備②		Course Lesson 2	Profileづくり、自己紹介準備、スライドづくり準備
第3回	10月6日	金	19:30~21:00	スライドづくり①		Course Lesson 3	4~6グループ、テーマにより構成する。1グループ3~5名予定
第4回	10月13日	金	19:25~20:25 *	オンライン交流①		Course Lesson 4	ダバオから浜松に、プレゼンテーション
第5回	10月27日	金	19:30~21:00	スライドづくり②		Course Lesson 5	4~6グループ、テーマにより構成する。1グループ3~5名予定
第6回	11月17日	金	19:30~21:00	オンライン交流②		Course Lesson 6	浜松からダバオに、プレゼンテーション



COLP サイト画面

<p>LMS (学習管理システム) Course</p> <p>COLP for High School Students</p> <p>コース</p>	<p>lesson 1</p> <p>1. Getting to know Vounteer Teachers</p> <p>In this lesson, Hamana High School students will have the chance to get to know the volunteer teachers from the Misha Project.</p> <p>(1) Introducing our activities (2) Introducing each of us individually to you.</p> <p>2. Introducing yourselves Using COLP Profiles</p> <p>We will make use of the profiles created by each participant in COLP (Cooperative Online Learning Program). These profiles include video clips and pictures, enabling everyone to share their personal information and experiences.</p> <p>Topic A: Registration in COLP You will register in COLP. We will guide you through the steps to ensure a smooth registration.</p>
<p>LCS (学習管理システム) Forum</p> <p>COLP for High School Students</p> <p>GO, HAMANA! Place of 2023</p>	<p>COLP for High School Students</p> <p>ichiro-takemoto Member 11月30, 2023 at 5:11 PM</p> <p>Hello po Sensei Marilyn,</p> <p>Could you do me a favor po?</p> <p>Meron po ako Thesis sa school gusto ko po maalam kung pano po naganapan sa Philippines ang English lesson.</p> <p>Salamat po.</p> <p>Marilyn Member 11月30, 2023 at 11:02 PM</p> <p>1. How will Davao City Special School (DCSS) implement immersion education by grade level, from grades 1 to 6? Yes, DCSS implement immersion education by grade level</p> <p>2. How will DCSS find and hire qualified English-speaking teachers? * Dept Ed (DCSS principal and hiring committee) conducts interview for all teacher applicant. If they can pass the interview, they need to take the English proficiency Exam for teachers. Only top 5 teachers will be accepted</p> <p>3. How will DCSS train the teachers to be sufficiently qualified English-speaking teachers?</p>

5.1 アンケート調査

5.1.1 静岡県立浜松北高等学校定時制

質問項目については、基本属性（年齢、日本滞在期間、義務教育在学期間、家族構成等）、母語と日本語の能力及び使用、キャリアに対する質問で構成されている（表3）。

表3 質問項目

単純集計	1.日常、日本語を話している	2.日本語が母語よりもよく話す	3.保護者から母語を習った	4.母語を勉強したい	5.卒業後、日本で進学、就職したい
とてもそう思う	12	12	0	4	12
そう思う	0	0	2	4	0
あまりそう思わない。	0	0	8	2	0
全くそう思わない	0	0	2	2	0

5.1.2 静岡県立浜松北高等学校定時制 考察

1. 日本語の積極的な使用とスキル向上

日常的に日本語を使用しており、日本語が主要なコミュニケーション手段として非常に広く利用されている。日本語スキルが母語よりも優れている。

2. 母語学習への意欲の差異

母語学習に積極的である一方で、あまり意欲がないと回答している者もある。母語の重要性は、文化資本として保護者から継承されることから、個々の家庭の事情や背景によるものと考えられる。

3. 保護者からの母語を学ぶことが少ない

保護者から母語を学ぶ機会が限られている可能性を示唆している。また、保護者自身が日本語を母語としている場合や、母語を話す環境にあまり接していない場合にも、保護者からの母語教育が少ないと考えられる。

4. 将来の展望と日本への希望

将来的な展望として日本での社会参加を望んでいる。これは、日本社会に溶け込み、積極的に関与したいという姿勢を反映している。

アンケート結果から、高校生の多くが日本語に非常に積極的であり、将来にわたっても日本での活動を希望している一方で、母語学習に対する個人差があることが示されている。日本社会において、多様な言語背景を持つ高校生への母語のサポートは、今後ますます重要になっていくと考えられる。これらの取り組みを通じて、高校生が母語を活かしながら、日本社会で活躍できる人材を育成していくことが重要であろう。

5.1.3 静岡県立浜名高等学校定時制

調査対象者 14人の日系フィリピンの高校生を対象とした。質問項目については、COLPにおいて、アンケート結果に基づき「母語」「母文化」「日本語」「日本文化」とし、各項目について、「1: 全くあてはまらない」～「5: とてもそう思う」の五件法で回答を求め、COLPで回収した。しかし、「母語と日本語」及び「母文化と日本文化」を組み合わせた項目は、「母語・母文化」及び「日本語・日本文化」の質問項目群と重複する質問となるため、集計時点で排除し、「母語・母文化」及び「日本語・日本文化」尺度13項目に対して主因子法による因子分析を行った。因子数については、固有値の減衰状況と因子の解釈の可能性から、2因子が妥当であると考えられたため、再度主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。

表4に、バリマックス回転後の因子パターンを示す。第1因子は母国の文化よりも日本の文化に対する親和性を示す項目が高い負荷量を示していたことから「日本文化への優位性」因子と命名した。第2因子は、日本語に対する愛着を意味する項目が高い負荷量を示していたことから「日本語に対する親和性」因子と命名した。

表4 「母語・母文化」及び「日本語・日本文化」尺度の因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

	第1因子 日本文化への優位性	第2因子 日本語に対する親和性	共通性
日本の文化をもっと学びたい	0.88	0.05	0.78
日本の文化を身近に感じます	0.85	0.02	0.74
日本の文化を他の人に教えたいです	0.71	-0.05	0.82
日本社会に貢献したいです	0.66	-0.26	0.50
自分の子どもには、母国の文化を伝えたくない（逆転質問）	0.64	0.04	0.42
日本語で話すのが得意だ	0.26	0.87	0.91
子どもには、日本語を教えたい	0.27	0.80	0.73
日本語をいかせる職業につきたい	-0.15	0.74	0.57
日本語で考えや気持ちを伝えることができる	0.03	0.74	0.54
日本語で話すことが好きだ	-0.18	0.55	0.36
因子寄与	3.27	3.21	6.48
因子寄与率(%)	25.2	24.7	49.9

5.1.4 静岡県立浜名高等学校定時制 考察

「母語・母文化」及び「日本語・日本文化」尺度の因子分析結果、日系フィリピンの高校生は日本の文化に対して高い関心を抱き、学びたいという願望が強く表れている。また、他者に日本文化を教えることや、日本社会への貢献への意欲も示されると同時に、日本語に対しても、自信を持ち、将来の展望や職業においても日本語を活かしたいという強い意欲が表れている。

一方で、母国の文化を子どもに伝えることに対しては、複雑な感情が反映されている点が注目される。これは、異なる文化間での価値観や文化的アイデンティティに対する複雑な感情が影響している可能性がある。

6. まとめと今後の課題

日系フィリピンの高校生は、日本語と日本文化に強い関心を示し、日本語が主要なコミュニケーション手段として活用されている。一方で、母語学習においては個人差があり、母語の重要性は保護者から継承される中で、家庭ごとに異なる事情や背景が影響していると推察される。今後の研究では、日系フィリピンの高校生の言語習得と文化継承におけるさらなる理解を深め、持続可能な方法で日本語および母語の向上を促進する手段を模索することが重要である。また、教育環境や家庭の影響を考慮し、個々の学習経験と進路に対する期待をより詳細に探求することが求められる。日系フィリピンの高校生が持つ多様な言語と文化的な背景を最大限に活かし、グローバルリーダーとして活動する教育の方法を明らかにしていくことが重要である。

謝辞

本研究に協力頂いた 静岡県立浜名高等学校定時制、静岡県立浜松北高等学校定時制、静岡県立湖南高等学校、NPO 法人わたぼうしグランドデザインに感謝する。

参考文献

浜松市教育委員会. 学校教育部教育支援課外国人支援グループ「外国人子供教育支援推進事業 説明資料」(令和5年5月1日)

<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/documents/85593/gaikokujin050501.pdf>

(最終検索日:2024年2月15日)

日本学術会議地域研究委員会多文化共生分科会, 「外国人の子どもの教育を受ける権利と修学の保障—公立高校の「入口」から「出口」まで」(令和2年(2020年)8月11日)

[<https://www.sc.j.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t289-4.pdf>] (最終検索日:2024年

2月15日)

Cummins, J. (1981). The Role of Primary Language Development in Promoting Educational Success for Language Minority Students. In California State Department of Education (Ed.), *Schooling and Language Minority Students: A Theoretical Rationale* (pp. 3-49). Los Angeles, CA: California State University.